

話す能力・聞く能力を育てる指導の工夫 ～スピーチの系統的指導プランの作成と活用を通して～

南城市立船越小学校教諭 大田 恵

I テーマ設定の理由

沖縄県の 課題

平成 20 年 3 月に、沖縄県教育委員会から出された全国学力・学習状況調査の結果における課題は、「聞き手に反応を確かめながら話す。要点をメモに取りながら聞く。」という技能面に見られる。この解決策の一つとして、学校教育では国語科における言語活動を中核にして、教育活動の中でできるだけ多くの知識と自己の表現方法を学ばせ、言語活動の充実を図ることが重要となる。

これまでの実践から

児童の実態アンケートから見ると、どの学年も話すことより聞くことが好きな児童が多いことが分かる(図 1)。話すことが好きと答えている割合は中学年頃から半分に減り、その理由として「緊張する」「上手くまとめられない」等が挙げられ、自信のなさがうかがえる。話す機会は多く設定され指導されているが、日常的な力としての定着は低いと言える。

現 3 年生(46名)で、2 年生レベルのテストを用いてレディネステストを行った結果、話す聞くの力が定着している児童は約半数であった。

残りの半数のうちほぼ定着という児童は 30%、あまり定着していないと見られる児童は 70% という結果が出た。その時期で身に付けるべき力がつかないまま、次の学年の内容を学ばせるとい現状が「話せない・聞けない」児童を育ててしまった原因となっている。誰もが程度、話したり聞いたりできるということから、下位層の児童に対する適切な手だてが不十分なまま、次の段階へ進んでいたことが課題となっている。

また、教師を対象にしたアンケート結果からは、話すことの苦手な児童に対する適切な対応や意欲的に話し合わせるための授業作り等が挙げられ、指導の工夫が必要となっている。

私自身の実践を振り返ると、各学年の指導事項の理解が不十分であったため、指導事項を明確にし系統性をおさえた指導ができなかった。そのため、児童が日常化できる確かな力を育てる工夫が足りなかったと考える。それで、児童に「話す能力・聞く能力」を定着させることができない、学習したことを日常的に活かす力をつけられなかったことの要因と考える。

本研究において

日常的活用

本研究では、児童が「話す能力・聞く能力」を確実に身につけ日常的に活用できることをめざし、発達段階に応じたスピーチの系統的指導プランの作成と他教科等での活用を図る。

系統的たすき

スピーチの系統的指導プランの作成においては「話すこと・聞くこと」の指導事項を明確に押さえ、系統的たすきを確実に引き継ぐことで指導の効果を高めたい。また、身に付けた能力を一教科で終わらせるのではなく、他の教科においても活用する場を設定することにより、確実な定着が図れると考える。さらに、教材の工夫を行うことで、児童が目的や目標を意識して取り組めるような学習を展開することが期待できる。

そこで、意図的・計画的に指導を行えば、話す能力・聞く能力を確実に育てることができると考え、本テーマを設定した。

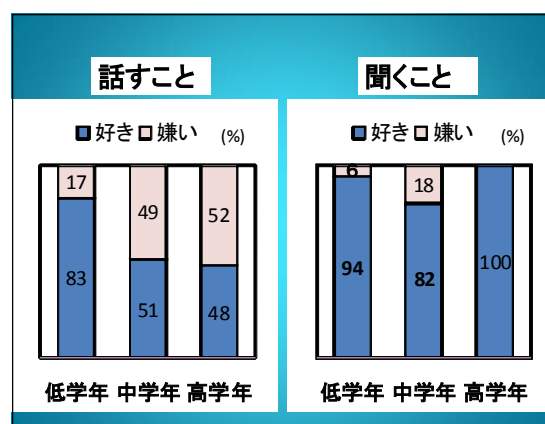


図 1 話すことや聞くことのアンケート(142人)

II 研究仮説と検証授業

1 研究仮説

国語科の「話すこと・聞くこと」において、次のような見通しを持って指導を工夫すれば、確実に学年に応じた話す能力・聞く能力が身に付き、日常的に活用させることができるであろう。

- (1) 学年ごとの指導事項を明確にしてスピーチの系統的指導プランを作成する。
- (2) 習得した力を確かなものにするために、他教科で活用する。

2 検証計画

「話すこと・聞くこと」の領域に関するアンケートを検証授業前後の4月と7月にとり、児童の変容をみる。

検証授業を3年生で国語科5時間、理科1時間行い、2年生で国語科5時間、生活科1時間行う。「話すこと・聞くこと」の学習において、スピーチの系統的指導プランの実践を通して、児童が話す能力・聞く能力を身に付け、他教科で活用することに有効かどうかを児童の活動・自己評価などをもとに検証する。

	検証の場面	検証の観点	検証の方法
①検証授業 3年生 ・国語科 5時間 ・理科 1時間	・国語科での実践	(1) スピーチの系統的指導プランをもとに単元の学習を進めることで、指導事項をおさえることができ児童は話す能力・聞く能力を身に付けることができたか。	・観察 ・ワークシート ・発言 ・学習活動 ・自己評価
	・他教科での活用	(2) 習得した力を確かなものにするために他教科等において活用することができたか。	
2年生 ・国語科 4時間 ・生活科 1時間	・国語科での実践	(1) スピーチの系統的指導プランをもとに単元の学習を進めることで、指導事項をおさえることができ児童は話す能力・聞く能力を身に付けることができたか。	・観察 ・ワークシート ・発言 ・学習活動
	・他教科での活用	(2) 習得した力を確かなものにするために他教科等において活用することができたか。	・発表会 ・自己評価
②授業実施前後のアンケート 事前(4月) 事後(7月)			・アンケート
③検証の視点 ◎児童が確実に学年に応じた話す能力・聞く能力を身に付け、スピーチの系統的指導プランの作成は有効であったか。 ◎習得した力を活かして他教科等での活用が見られたか。			①, ②の結果より

III 研究内容

1 「話す能力・聞く能力」について

(1) 国語科の目標との関連

学習指導要領の改訂に伴い、基礎的・基本的な知識、技能、思考力、判断力、表現力を児童に育むために言語活動の充実が重要となった。

国語科では、言語活動を主体として三つの領域が設定され、「国語を適切に表現し正確に理解する能力の育成」を目標としている。さらに、各領域の学習を通して、言語の知識を身に付けることと言語を活用して伝え合うことを目指している。

とくに「話すこと・聞くこと」の領域を中心にした学習指導の充実は、国語科の目標と大きく関わり、他の学習活動へも役立つと言える(図2)。

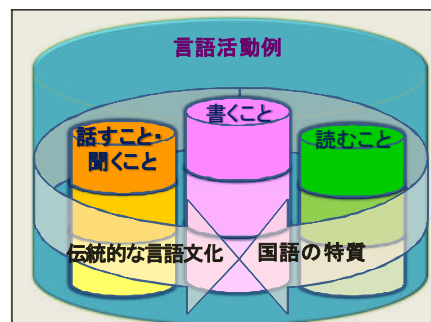


図2 国語科で培う力

(2) 「話す能力・聞く能力」とは

① 話す能力

「話す」という技能で、どの学年にも共通する基本的な視点で捉えると、次の㉠～㉤で挙げられる。各学年に応じ、相手意識や場の意識を深めていくことが重要である。

基本的技能	発達段階に応じた話す能力
㉠ 聞きやすい音量で話す	低学年 【相手に応じ身近なことについて事柄の順序を考える】 中学年 【相手や目的に応じ調べてことについて筋道を立てる】 高学年 【目的や意図に応じ伝えたいことについての的確にまとめる】
㉡ 聞きやすい速さで話す	
㉢ 短く話す	
㉣ 目を見て話す	
㉤ 話題を決めて話す	

話すことの能力とは、これらの技能を土台として相手や場に応じ発達段階に応じた能力を駆使することだと考えられる。

② 聞く能力

「聞く」という技能で、どの学年にも共通する基本的な視点で捉えると、次の㉠～㉤で挙げられる。

基本的技能	発達段階に応じた聞く能力
㉠ 目を見て聞く	低学年 【身近なことについて大事なことを落とさない】 中学年 【調べてことについて話の中心に気をつける】 高学年 【伝えたいことについて相手の意図をつかみながら】
㉡ 反応しながら聞く	
㉢ 好意的・受容的に聞く	
㉣ 共感や疑問を持ちながら聞く	
㉤ 中心に気をつけて聞く(メモ)	

聞くことの能力とは、相手の話の内容を自分のものとして受け入れるか否かを判断しながら聞く積極的な行為である。低学年の事物を聞き取る能力から始まり、中学年では中心を意識しながら聞き、高学年になると考えを比較しながら聞くという段階に至る。

(3) 「話し手」を育てる「聞き手」

日常生活において「聞く」という能力は、すべての基礎となる。人間的な成長にとっても、話し合いの土台を作るうえでも、人間関係づくりにおいても重要な意味を持つ。「話すこと」と「聞くこと」との関連からすれば、「聞くこと」の習得と向上に努めることは「話すこと」を向上させ豊かにしていくことにつながる。相手の話すことを大事にし、自ら聞こうとする心がけと実践とが求められる。「聞くこと」の深まりは「話すこと」を向上させるものであり「話すこと」の原点とも言える(図3)。

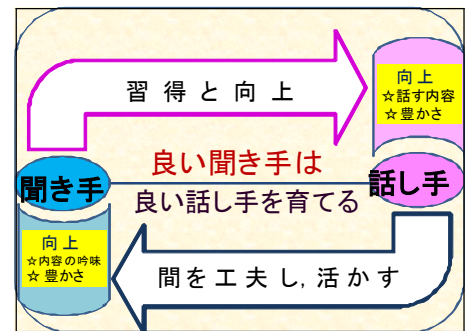


図3 話すことと聞くことの間

2 「話すこと・聞くこと」について

(1) 「場」の成立

話し手や聞き手の間には、両者を取り囲む「場」ができ「相手」に対する意識が必要となってくる。話す能力・聞く能力を駆使し、相手を意識した交流によってコミュニケーションは成立すると言える。

話し手が言葉によって、ある事柄を聞き手に伝える過程は一連の流れで示される。伝える内容や方法は発達段階で異なり、段階を経て身に付けていくことで力が定着される(図4)。さらに、話し手の伝達

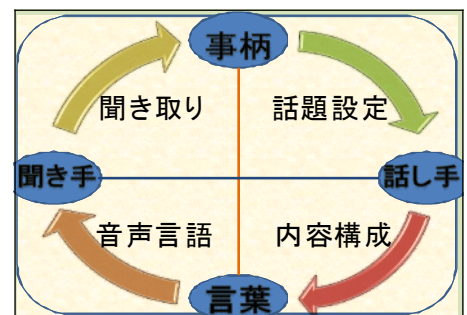


図4 コミュニケーションの成立

相手意識

を受ける聞き手の「よい聞き取り」という点も重要であり、相手を意識した「場」の成立において、聞き手を育てるための指導も欠くことはできない。納得するまで問い続ける聞き手の存在が、話すこと・聞くことの深まりを可能にする言える。

(2) 「話すこと・聞くこと」の指導の系統

国語科の各領域では、低、中、高の発達段階に応じて国語を適切に表現し正確に理解する能力の育成をめざして、目標や指導内容、言語活動、指導事項が設定されている。

「話すこと・聞くこと」の能力を確実に身に付けさせるためには、指導の系統を教師が把握しておくことが重要となる。教師が、学年ごとのつながりや深まりを理解して指導に当たることによって意図的・計画的に指導が展開される。さらに、指導の系統と照らし合わせて、各学年の単元の配列を見ると、時期的に同じ内容の言語活動が繰り返し指導されていることが分かる。これは、育成すべき能力を段階に応じて指導することや反復的・螺旋的に指導することの重要性を意味する。

また、国語科の単元は「話すこと・聞くこと」のみに限らず他の領域においても能力を活用する場が取り入れられる。このように、計画的に学習を進めていく中で、児童は確実に話す能力・聞く能力を身に付けていくのである。

授業実践においては、学級の児童すべてが参加できるような場や状況の設定を教師が計画し、教材を工夫することも効果を高める。学習において身に付ける能力を、児童自身も意識して参加することで理解をうながし、主体性と向上心が育まれる。指導事項を明確にするための教材として、「話す聞く名人カード」を作成し一人一人に持たせることで、児童は目標を意識することが可能になる。ただ話したり聞いたりするだけではなく、身に付ける能力ごとに達成する意欲と喜びを引き出すことができる。(資料1)

系統の把握

教材の工夫

合かくシールを集めよう(裏)			話す聞く名人カード(表)	
話すこと	合かく	聞くこと	3年組	
相手を見る		相手を見る	顔	名前
声の大きさ速さ		中心に気を付ける	あなたに、3年生の話す力聞く力がついたことを認定します。 担任 印	
問の取り方		質問をする		
理由をあげる		要点をメモする		
組み立てる		感想をのべる		

資料1 教材の工夫例 「話す聞く名人カード」

3 スピーチの系統的指導プランについて

(1) スピーチとは

独話の
一形態

スピーチとは、場の目的や趣旨に即し、一人の話し手が多数の聞き手に対して行う独話の一形態のことである。コミュニケーションを築く活動としての第一歩は「挨拶」であり、次に「自己紹介や説明・報告」が位置付く。スピーチを通した自己紹介は児童の「話す力」を育てていく上で重要な指導である。

そこで、学習活動における説明・報告の指導では、自己紹介を初歩的段階として指導したい。スピーチの指導では、身近な題材を活用してできること・準備期間が短いこと、という2点で指導しやすい活動だと言える。スピーチという形を通して、話し手は「どんなふうに話せば相手に伝わるのか考えて話すこと」を学び、聞き手は「目的をもって話を聞き取ること」を学び思考を深めることができる。

スピーチは「自分を知ってもらおう」という内容で、年度当初に計画されることが多いが、身近な人や出来事を紹介するという捉え方で考えると、来るべき機会に備えると言う意味が含まれ、いつでも指導することが必要である。そして、何より大切なことは、教師がよい話し手・よい聞き手となって見本を示すことである。

(2) 言語活動におけるスピーチの位置づけ

国語科の目標を達成するために、様々な形態の言語活動が展開され、取り上げる活動によって各教材のねらいも効果が高まる。「話すこと・聞くこと」の指導事項で話題設定を基に系統性を見た場合、全学年が自分に関する内容で系統化されている。自分自身に関する話題から関心のある話題・伝えたい話題へと広がり、その内容に適した言語活動としてスピーチによる指導を取り上げたい。

- 低学年・・・身近なことや体験したことなどについて、**順序**を考えながら話す。
- 中学年・・・関心のあることなどについて、**筋道**を立てて話す。
- 高学年・・・考えたことや伝えたいことなどについて、**的確**に話す。

さらに、意図的・計画的な場の設定で児童は話す材料を集め、繰り返し練習し、お互いに認め合える言語活動が展開され、話すこと・聞くことを楽しく学べる。

(3) スピーチを基礎とした言語活動の展開

児童にとって、心の中にある言葉(内言)を声に出して話すことが言語活動の第一段階である。話す聞くの基礎となるスピーチは身近な事柄を話題として設定するため、低学年の児童でも理解しやすい内容である。そのため、話す・聞くの言語活動は発達段階に応じてスピーチから始まることで、思考の流れがスムーズになると考える。スピーチの学習活動を通して考えや思いを伝える方法を身に付け、「分かりやすく相手に伝える力」や「要点をおさえながら聞く力」を身に付け、論理的思考が形成される(図5)。

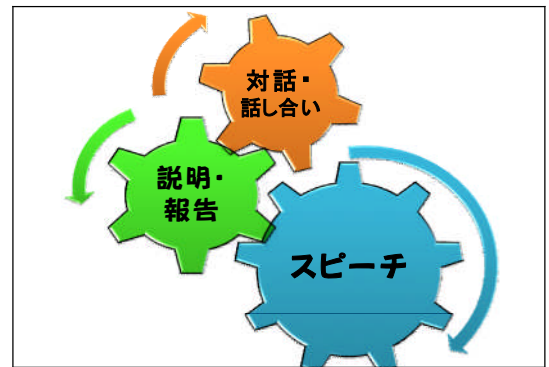


図5 「話すこと・聞くこと」の言語活動の展開

そこで、授業のみならず日常を通して指導が可能なスピーチを系統立てて指導していくことは他の学習でも役立ち、言語活動の展開では大きな意義があると考えられる。

(4) スピーチの系統的指導プラン

学校教育におけるスピーチでは、話し手だけではなく聞き手とともに活動するスピーチ学習を行いたい。話し手がスピーチの内容や構成をまとめて話し、聞き手がそれを受けて質問や感想をすることで両者が関わり合い、スピーチの内容が豊かなものになる。そのため、各学年の指導事項をしっかりとおさえ次の学年へたすきを引き継いでいけるよう系統に沿った指導プランの作成が重要となってくる。スピーチの指導を通して「順序」「話の中心」などをはじめ、「理由」「具体例」などの学習事項も関連させて指導を行うことも大切となる。さらに、「話すこと・聞くこと」の単元計画では、導入時にモデルを見せることで児童は学習の目標を意識し、それに向かって学習する意欲も変わってくる

また、国語科の単元学習だけにとどまらず学校生活のあらゆる活動で意図的に取り入れていくことが、身に付けた能力の定着を可能にするとと言える。指導事項の明確にしたスピーチの内容・計画的な授業実践・教材の工夫・意図的な場の設定を中心としたスピーチの系統的指導プランを作成し実践する(図6)。

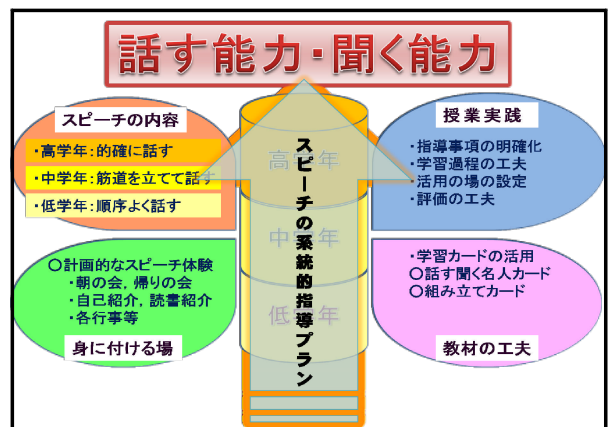


図6 「話す能力・聞く能力」を育てる指導実践の構想図

思考の流れ

各学年の
指導事項

スピーチの系統的指導プランは、学習指導要領で学年ごとに明記されている指導目標・指導内容等を中心の柱として位置づけ、指導事項をおさえて作成する(図7)。低・中・高の各段階に応じて活用し、系統的に指導できるよう構成する。

〈スピーチの系統的指導プラン〉

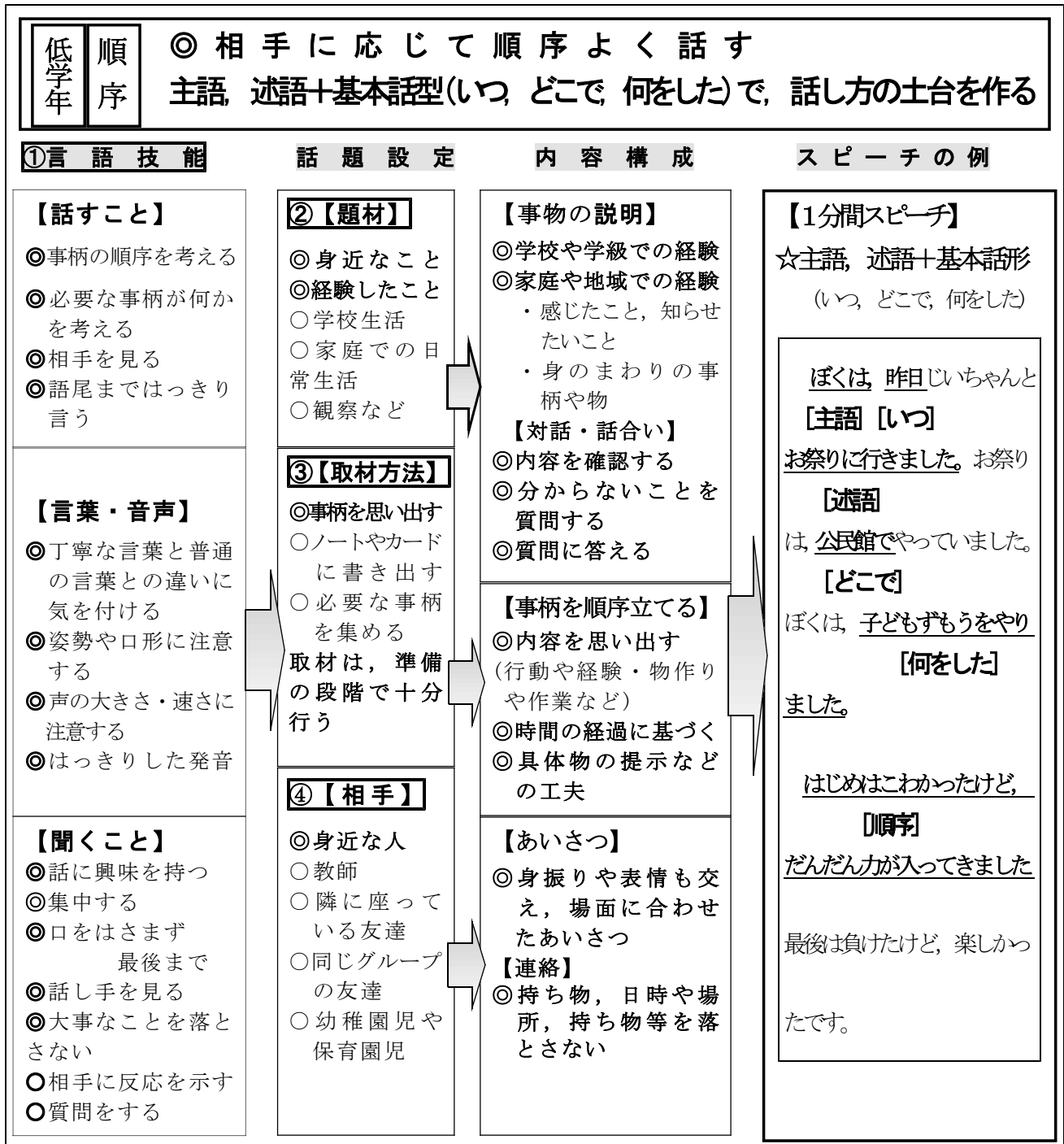


図7 スピーチの系統的指導プラン【低学年】

本研究の授業実践では、中学年のスピーチの系統的指導プランを通して検証を行う。3年生の「話すこと・聞くこと」の目標である「筋道を立てて話す能力」および「話の中心に気をつけて聞く能力」の育成を目指して指導を展開したい。まず、①身に付けたい言語技能を土台にして②関心のある身近な題材から話題を設定し、③取材方法はメモを活用を通して④身近な人を相手に内容を構成する。教師と児童が意識して学習を進めるために、教材の工夫や場の設定等も重要になると考えられる。

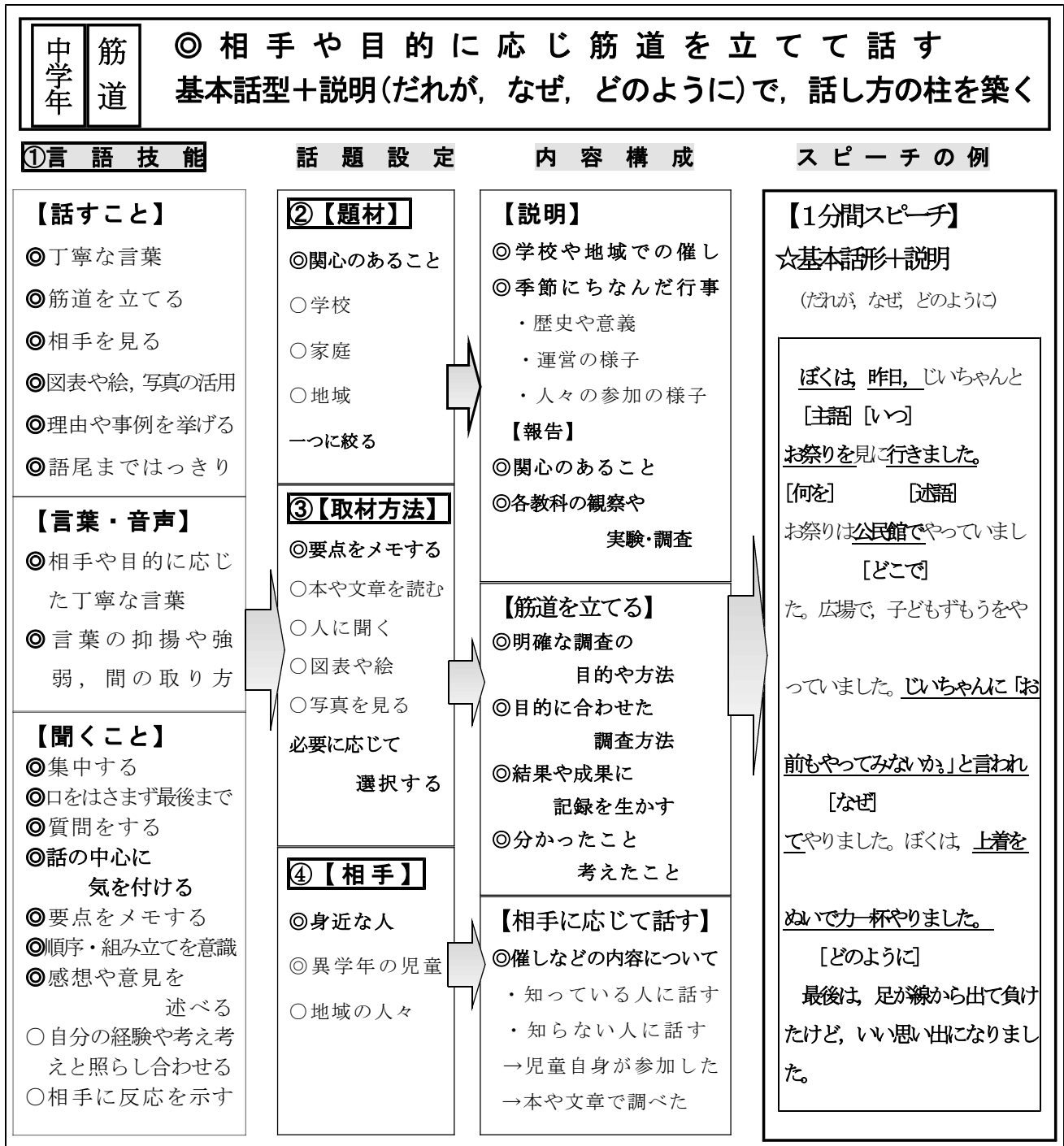


図7 スピーチの系統的指導プラン【中学年】

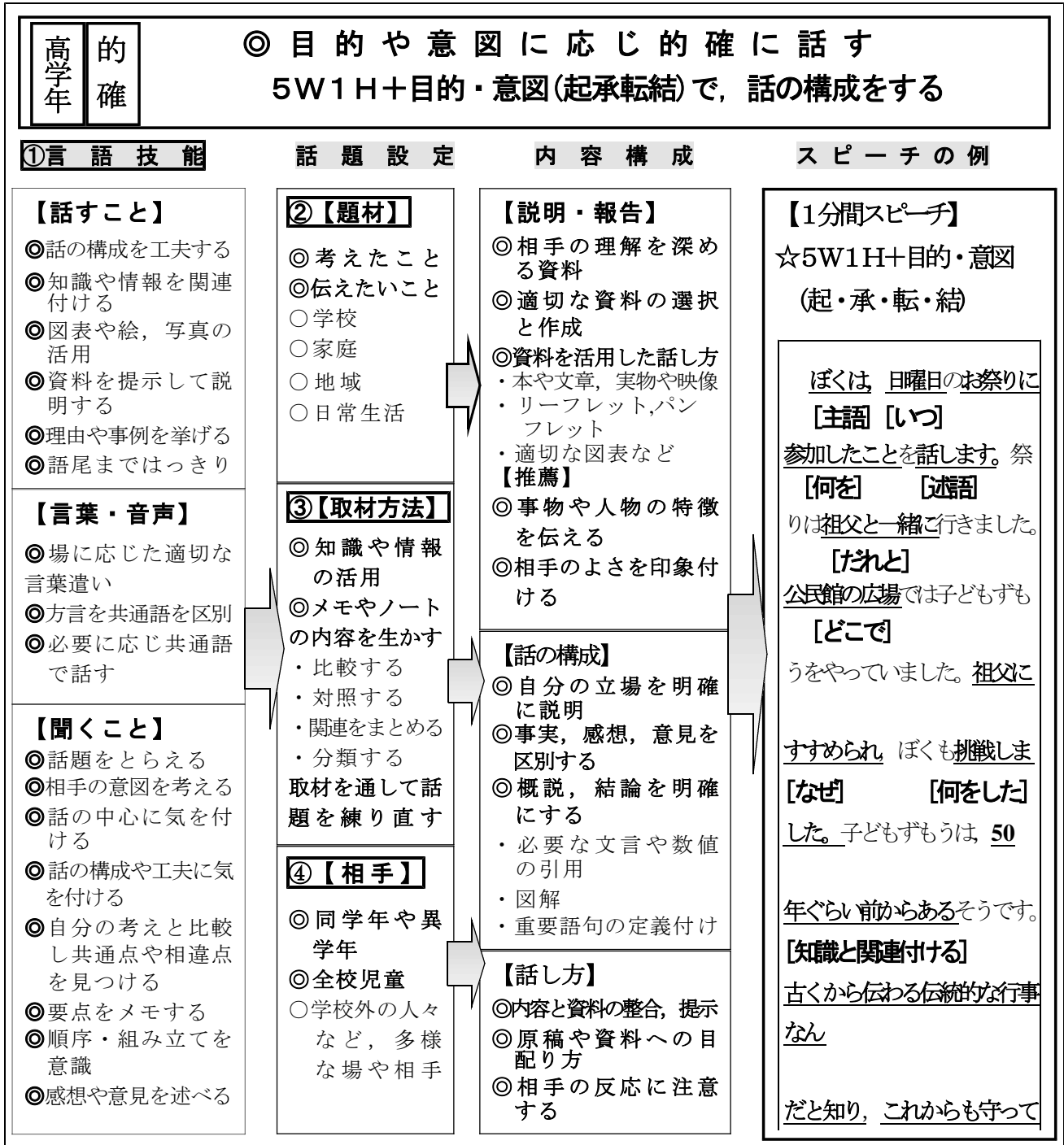


図7 スピーチの系統的指導プラン【高学年】

IV 授業の実践

1 検証授業の実際

検証項目	<p>◎国語科の「話すこと・聞くこと」における学習においてスピーチの系統的指導プランを作成し実践することから</p> <p>①学年ごとの指導事項を明確にしてスピーチの系統的指導プランを作成し指導を工夫することで確実に学年に応じた話す能力・聞く能力を身に付けることができる。</p> <p>◎習得した力を確かなものにするために、他教科において活用することから。</p> <p>②スピーチの系統的指導プランをもとに身に付けた力を他教科等において活用することで日常的に活用する力を育む。</p> <p>◎①と②から、確実に学年に応じた話す能力・聞く能力が身に付き、日常的に活用させることができたか。</p>
------	--

回	月 日	校時	検 証 項 目	検証の方法
	6月25日(木)	3校時	○レディネステスト	
1	7月 1日(水)	2校時	※学習の見通しを持ち、学習計画を立てる。 ねらい：大事なことが正しく伝わる話し方聞き方を学ぶ	・ワークシート
2	7月 2日(木)	3校時	※取材の方法を学ぶ、話を組み立てる。(話し手・聞き手) ねらい：理由を挙げた話し方・聞き取り方の工夫を学ぶ	・ワークシート
3	7月 6日(月)	4校時	※聞き取りメモの取り方、応答の仕方を練習する。 ねらい：番号を付け理由を整理して話すこと・メモを取りながら聞くことを練習する	・ワークシート ・観察
4	7月 9日(木) 本時・検証(1)	5校時	検証①理由を挙げながら、話を組み立てて伝える。 ②メモを活用して、話の内容を正確に聞き取る。	・発表 ・ワークシート
5	7月10日(金)	3校時	◎単元テスト	
☆	7月13日(月) 本時・検証(2)	2校時	☆理科「植物を育てよう」・・・植物のからだのつくり 検証①理由を挙げて話す能力を活用して、内容を組み立てて分かりやすく説明する。 ②要点をメモしながら聞く能力を活用して、話の内容を正確に聞き取ることができる	・発表 ・ワークシート ・学習ノート

2 検証授業本時の指導

- (1) 単元名 どちらがすき
- (2) 単元について
 - ①児童観 (省略) ②教材観 (省略) ③指導観 (省略)
- (3) 単元目標
 - ① 単元の目標
だいたいなことが正しく伝わるように、話し方や聞き方を工夫する。
 - ② 観点別目標
 - 関心のあることから話題を決め、要点をメモしながら聞き取る。【話題設定・取材 ア】
 - 相手や目的に応じて、理由を挙げながら丁寧な言葉で話す。【話すこと イ】
 - 話の中心に気をつけて聞く。【聞くこと エ】

(4) 単元の指導・評価計画(全5時間)

次	時	学 習 活 動	ね ら い (評価規準・方法)	A 十分満足できる	C 努力を要する (手だて)
		・事前テスト			
一 次	1	◎いくつかの例を見比べて、 正しく伝わる話し方・要点 をおさえた聞き方を知る。 ※学習の見通しを持つ	○だいたいなことが正しく伝わる話 し方聞き方を学ぶ計画を立て、 話題を設定することができる。 (ワークシート) 【課題設定】	・身近な題材から、似たもの どうしを比べる内容の質問 を決めることができる。	・質問の題材にふさわしい 事例をいくつか挙げ、そ の中から関心のあるも のを選ばせる。
二 次	2	◎だいたいなことが正しく伝わ る取材の方法や答え方を理 解する。 ※学習カードの活用 ・理由を挙げて答える ・要点をメモして聞く	○理由を挙げた話し方・正確な 聞き取り方をするための工夫 を知り、学習カードを使って まとめることができる。 【取材ア】 (ワークシート・組み立てメモ)	・話し方や聞き方の工夫に ついて関心を持ち、大事 なことが正しく伝わる方 法を考えることができる。	・前時の事例を参考に、 よい話し方・聞き方 の具体的な方法に着 目させる。
三 次	3	◎メモの取り方や質問の仕方 を練習する。 ※学習カードの活用 ・グループ学習	○理由を挙げた話し方・要点を メモする聞き方を身に付ける ことができる。【話しイ・聞くエ】 (ワークシート・組み立てメモ)	・要点をおさえて理由を説 明すること・番号や記号 を使って聞き取ることが できる。	・ワークシートに書き 出しの言葉を加え、 思考を促すきっかけ を与える。
四 次	4	◎二グループ組になって「ど ちらが好きか」を聞き合う。 ・互いに聞き合い、分かった ことを報告し合う。	○だいたいなことが正しく伝わる ように話し方・聞き方を工夫 することができる。 【話しイ・聞くエ】(ワークシート・発表)	(話) 要点が分かるように番 号を使って理由を答える (聞) 番号や記号を使って要 点をメモする。	(話) 理由を減らし、短 い内容で話をさせる。 (聞) メモのポイントを 意識させる。
	5	・事後テスト			
活 用 ・ 理 科	本 時 ・ 検 証	◎植物のからだのつくり で調べたことをまとめ、 発表する。 ・グループごとに説明し 質問を受け付ける。	○調べて分かったことを要 点をおさえて話す。 ○番号や記号を使って要点 をメモする。 (ワークシート・発表)	・まとまりごとに話し たり正確に聞き取る ためにメモを活用し て聞くことができる。	(話) メモを持たせ話 す内容を確認させ る。 (聞) メモのポイント を意識させる。

3 研究仮説(1)における検証授業

(1) 検証の目的

スピーチの系統的指導プランを通じた話す・聞くの学習で、学年に応じた能力を身に付けることができたかを確認する。

- ①理由を挙げながら、内容を組み立てて話す。
- ②メモを活用して、話の内容を正確に聞き取る。

(2) 授業仮説



スピーチの系統的指導プランを通して指導事項を明確におさえた指導を行うことで、児童は、話す能力・聞く能力を身に付け、だいたいなことが正しく伝わるように話し方・聞き方を工夫することができるであろう。

(3) 本時のねらい

だいたいなことが正しく伝わるように話し方・聞き方を工夫することができる。

(4) 準備 ワークシート(組み立てメモ・聞き取り)、国語ファイル(児童用)

(5) 本時の展開(5/5)

過程	学習活動	指導の留意点 ・学習形態 ・活用する教材、掲示物	★仮説の検証(1) ○個への手だて ◎評価事項、方法
つかむ	1 理由を挙げた話し方・要点をメモする聞き方を確認する。 2 学習計画をもとに、本時の学習を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">めあて 上手に聞こう、話そう</div>	①これまでの学習を想起させ学習の目標を意識させる。 ②本時の流れを理解させる。 ・学習計画表の掲示	
展開	3 ニグループ一組になって、「どちらが好きか」を聞き合う。 Aグループ(質問) 例 体育と図工と、どちらが好きですか。 Bグループ(答え) ・メンバーがそれぞれ理由を挙げて答える。 Aグループ(メモする) ※終わったら立場を交代する 4 聞き合ったことをまとめて、グループごとに発表し合う。	③前時までには、各グループの質問事項を決めておく。 ・グループによる学習形態 ・組み立てメモの活用 ・ワークシートに要点をメモ ・聞き取りの手順やポイントを掲示  ④各グループの聞き取りメモをまとめ、よかったところなどを発表させる。	★理由を挙げながら話したり、要点をメモしながら聞くことができたか。 ○組み立てメモを使って、順序よく話をさせる。 ○部分的な文章や番号の書かれたワークシートを用意する。 ◎事柄ごとにまとめて話したり、メモを工夫しながら聞いたりすることができたか。 (ワークシート、観察、発言)
まとめ	5 正しく伝えるための話し方・聞き方を確認し、学習内容が使える場面を考える。	⑤国語で学習したことが他教科等でも活かせることに気づかせ、活用の場を意識させる。	

4 授業仮説の検証

授業仮説について、学級全体の評価をもとに考察する。表1は、ワークシートによる組み立てカードと聞き取りメモよりまとめたものである。

表1 学級全体の学年に応じた話す能力・聞く能力の評価(組み立てカード・聞き取りメモより)

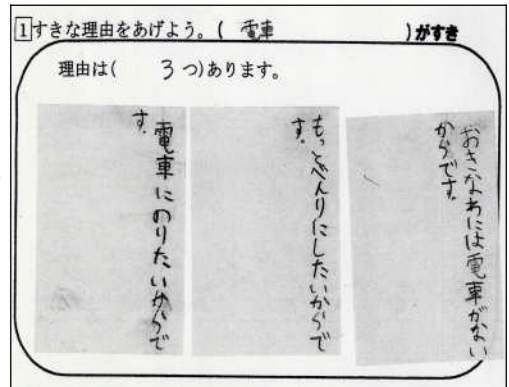
検証の場面	検証の観点	判定規準				検証の方法
		A 十分満足できる	B 満足できる	C やや努力を要する	D 努力を要する	
話す能力	・話の内容を組み立てて、理由を挙げながら話すことができたか。	好きな理由が正しく伝わるように話すことができる。 48%(11人)	好きな理由が伝わるように話すことができる。 48%(11人)	理由を挙げて質問に答えることができる。 4%(1人)	結論を答えることができるが、理由を挙げるのに時間がかかる。	・発言 ・組み立てカード
聞く能力	・要点をメモしながら聞くことができたか。	理由を正しく聞き取り要点をメモすることができる。 70%(16人)	好きな理由の要点をメモすることができる。 26%(6人)	メモを取ることはできるが要点をまとめることはできない。 4%(1人)	メモをとりながら聞くことができない。	・観察 ・聞き取りメモ

○スピーチの系統的指導プランをもとにした学習で能力の定着は図れたか。

※研究仮説の「話す能力・聞く能力」の結果より検証する。

(1) 話の内容を組み立てて、理由を挙げながら話すことができたか。

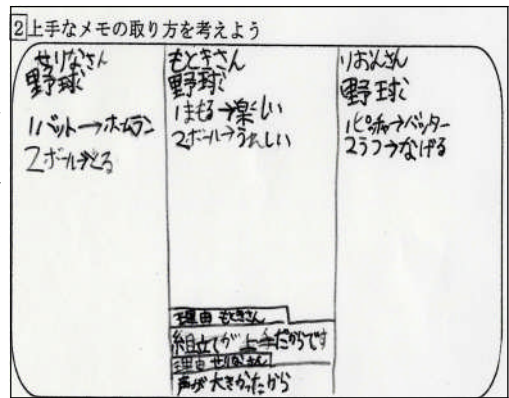
表1より話す活動において、「話の内容を組み立てて、理由を挙げながら話すことができたか」については、「十分満足できた」または「満足できた」児童は96%(22人)であることが分かった。スピーチの系統的指導プランにそって学習を進めることは、担任が児童にどんな力をつけさせるかを明確に意識しながら指導を進めることであり、話すための準備と練習が計画的に展開され話す能力の獲得に効果があることが分かった。



話を組み立てる活動(資料2)では、スピーチの系統的指導プランにおける中学年の指導事項に
資料2 内容を組み立てるワークシート
応じて、基本話型に説明(理由)を付け加えて話す能力を目標とし、ほとんどの児童が理由を挙げた話し方を理解することができた。しかし、好きな理由として挙げられたものの中には、簡潔になりすぎたため内容の浅さも感じられた。好きな気持ちを相手に分かりやすく伝える理由の挙げ方や話す順序の工夫を、今後も継続して指導していく必要がある。

(2) 要点をメモしながら聞くことができたか。

表1より聞く(取材)活動において「要点をメモしながら聞くことができたか」について見てみると、「十分満足できた」または「満足できた」児童は96%(22人)になった。要点をおさえてメモを取る活動(資料3)では、学習の導入時にモデルを見せ、さらに学級全体で真似をすることで児童は要点をおさえるという意味を理解し、正しく聞き取るための能力を身に付けることができたと言える。このことは、話し手の立場における意識の持ち方にも関わりがあったと言える。



しかし、中には、メモを取ることに夢中になり相手意識の弱くなる児童も見られた。これからの指導では、相手の話を聞くことに重点をおき必要なときに軽くメモを取るという方法を身に付けさせていくことが必要である。

5 研究仮説(2)における検証授業

(1) 検証の目的

国語科で習得した話す能力・聞く能力を、他教科で活用することで日常的な力を育むことができるかを確認する。

- ①調べたことの内容を組み立てて説明し、相手に分かりやすく伝える。
- ②説明を正確に聞き取るために、メモを活用することができる。

(2) 授業仮説



学年に応じた話す能力・聞く能力を確実に身に付ければ、他教科等の「話す・聞く」活動において活用することができるであろう。

(3) 本時のねらい

「植物のからだのつくり調べ」を通して、分かったことをまとめ説明することができる。

(4) 準備 学習ノート、説明用掲示物等、ワークシート

(5) 本時の展開(4/4)

過程	学習活動	指導の留意点 ・学習形態 ・活用する教材, 掲示物	★仮説の検証(2) ○個への手だて ◎評価事項, 方法
	つか か む	1 拡大図をもとに植物のからだのつくりを確認する。 2 本時の学習を知る。 めあて いろいろな植物のからだのつくりについて考えよう	①これまでの学習を確認する。 ②植物の葉・茎・根に視点をおかせる。 
展 開	3 「植物のからだ」について説明し合う。 Aグループ(説明) 例 エノコログサのつくり ・調べて分かったこと等 他のグループ(メモ) ・国語科で学んだメモの工夫を活かす ※終わったら質問をする	③前時までに, 各グループの調べた事柄をまとめておく。 ・グループごとの説明 ・聞き取りワークシートの活用 ・聞き取りの手順やポイントを掲示 	★調べて分かったことの要点をおさえながら話したり, 番号や記号を使ってメモしながら聞くことができたか。 ○メモを使って, 順序よく話をさせる。 ○部分的な文章や番号の書かれたワークシートを用意する。 ◎事柄ごとにまとめて話したり, メモを工夫しながら聞いたりすることができたか。 (ワークシート, 観察, 発言)
	ま と め	4 植物のからだは, どれも葉・茎・根からできていることを確認する。 5 学習したことをもとに例題の植物について考えをまとめる。	④学習で学んだことを振り返り植物のからだはどれも葉・茎・根のつくりになっていることを理解させる。 ⑤学習内容をもとに根・茎・葉の分類をさせ, 考えを出し合い関心を広げさせる。 ○グループごとに考えを相談し合い, 意見をまとめさせる。

6 授業仮説の検証

授業仮説について, 学級全体の評価をもとに考察する。表2は, 話すことは授業参観者による観察で評価し, 聞くことはワークシートによる聞き取りメモより評価したものである。

表2 学級全体の習得した能力を活用することの評価(観察・聞き取りメモより)

検証の場面	検証の観点	判定規準				検証の方法
		A 十分満足できる	B 満足できる	C やや努力を要する	D 努力を要する	
他教科等での活用(理科)	国語科で習得した能力を活用して発表することができるか	話すこと まとまりごとに話し, 質問に対し分かりやすく答えている。 13% (3人)	話すこと まとまりごとに話している。 70% (16人)	話すこと カードに頼って話している。 17% (4人)	話すこと 前に立って話すことができない。	・発言 ・観察 ・ワークシート
		聞くこと 正確に聞き取るためにメモの工夫ができる。 61% (14人)	聞くこと 大体のメモをとりながら聞くことができる。 31% (7人)	聞くこと 部分的にメモをとりながら聞くことができる。 8% (2人)	聞くこと メモをとりながら聞くことができない。	

○国語科で習得した話す能力・聞く能力を, 他教科で活用させることは可能か。

※研究仮説の結果より検証する

○ 国語科で習得した力を他教科で活用することで日常的な力を育むことができたか
 話すこと・聞くことの双方から見てみると、つぎのような検証結果が得られた。

(1) 話すこと

表2より話す活動において、「調べたことの内容を組み立てて説明し、相手に分かりやすく伝えることができたか」については、「十分満足できた」または、「満足できた」児童は83%(19人)で有効であることが分かった。理科を取り上げて検証した結果、日常的な活用力を築くことになることが分かった。担任の計画的・意図的な仕組みによって様々な形で場を設定することができ、各教科及び諸活動における活用を積み重ねていくことが大切である。さらに、どんな力を活かして学習するのかを児童にも意識させることが日常的な活用につながると言える。

(2) 聞くこと

表2より聞く活動において、「正確に聞き取るためにメモを工夫することができたか」については、「十分満足できた」または、「満足できた」児童は92%(21人)で有効であることが分かった。要点をメモしながら話を聞く能力は、日常的な力として重要であり、国語科で身に付けるとともに他教科や他の活動において活用していくことで確かな力となって定着していく。国語科の学習で学んだことを活かし、メモ用紙を上手に区切ったり記号や括弧などを使ったりしながら他教科でも工夫したメモの取り方(資料4)をすることができ意欲的に活動する姿が見られた。

②上手なメモの取り方を考えよう

さとし サッカー ①楽しい ②あせそび	まのん サッカー ①シュート ②サッカー3!	みき サッカー ①足でける ②いろいろできる
あすか サッカー ①ころがる ②けるのがすき	みき 理由がわかりやすかった。	

能力の活用

☆それぞれの発表をメモしよう

①グループ (葉) 長い (金) 短かい=(ゆわらかい) 根 長しても短も短している	⑤グループ (葉) まいばばにまもる (金) 長い=土の中に入っている 根 もろもろ
③グループ (葉) 長い=つるつる (金) 短かい=ほこまこ 根 ほそ長い=	⑥グループ (葉) ほそ(ニ)ち(ホ)ホセ (金) 短かい=茶色 根 短かい=えいよう
④グループ (葉) つるつる=ゆわらかい (金) 茶色=がたい 根 ほそ(ニ)長い	

【 国語科の学習におけるワークシート 】
【 理科の学習におけるワークシート 】

資料4 メモの取りながら聞き取る活動の変化

国語科で学習した際のメモの取り方と今回の理科におけるメモの取り方を比較してみても、児童は確実に学んだ事を自分の力として活かしていることが分かる。

しかし、児童にとって話を聞きながらメモをとるという活動ことは容易ではなく、メモを取ることに集中しすぎて話の中心を適切に聞くということが弱くなってしまいう児童も見られた。話すこと・聞くことにおける能力の活用は見られるが、内容的な質の向上と活動的な技能の向上は継続して実践を繰り返していくことで児童が身に付けていくと期待できる。

以上のことから、スピーチの系統的指導プランにそった学習で身に付けた能力を、他教科で活用することは、日常的な力を目指すために有効であると考えられる。

このことから、日々の教育活動において、国語科で身に付けた能力を活かすように、意図的・計画的に実践していかなければならないと分かった。

V 研究の結果と考察

研究の考察は、各検証授業に関する事前・事後テストの結果(話す・聞く)による評価、児童の事前アンケート(4月)・事後アンケート(7月)の比較、さらに他学年の協力により行った検証授業における事前・事後テストの結果(話す・聞く)による評価を基に行った。

1 スピーチの系統的指導プランの作成および授業実践で、学年ごとの指導事項を明確にして学年に応じた話す能力・聞く能力を確実に身に付けることができたか。

図8は、スピーチの系統的指導プランによって単元を進めた学級で、事前・事後テストを実施しその結果を比較したものである。

中学年の指導事項である「理由を挙げて話す能力」と「中心に気をつけメモしながら聞く能力」それぞれについて、事前テスト事後テストともに同じ内容で検証してみた。

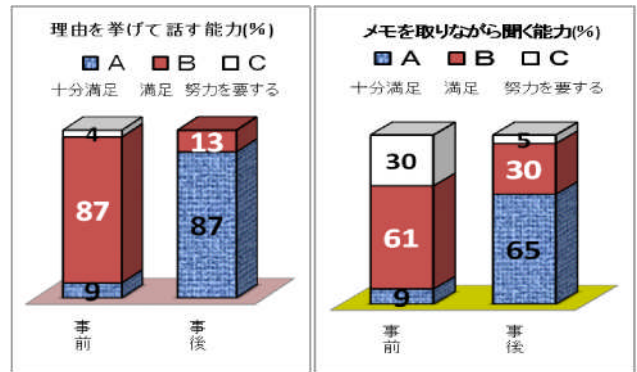


図8 学年に応じた話す能力・聞く能力の比較(23人)

テスト結果

その結果、理由を挙げて話す能力においては努力を要すると評価された児童は0%になり、どの児童も学年に応じた話す能力が身についたといえる。

また、メモを取りながら聞く能力においては、十分満足または満足と評価された児童が95%となり、スピーチの系統的指導プランに沿って単元を進めることは、聞く能力を身に付けるのに有効であることが分かった。

アンケート結果

図9は、スピーチの系統的指導プランによって単元を進めた学級で、話すこと・聞くことの実態アンケートを実施し、比較したものである。4月には話すことが好きな児童は61%だったが、単元学習後の7月に行なったものを見ると91%の児童が好きと答えていることが分かった。その理由として、「話すことが、楽しくなった。」や「理由を考えるのが楽しいから。」「友達がちゃんと聞いてくれるから。」等が挙げられ、話すことに対する態度の変容もうかがえる。

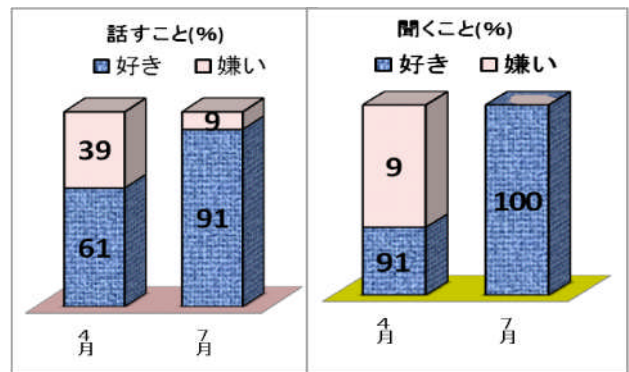


図9 話すことや聞くことのアンケート(23人)

このことは、スピーチの系統的指導プランを実施したことにより学年に応じた指導事項が身につく、「話す・聞く」の活動に自信が持てるようになった児童が増えたこととらえることができる。

他学年での結果

さらに図10は、スピーチの系統的指導プランを他の学年に協力してもらい実践してみた結果である。話すことのできる能力で「十分満足」または「満足」と評価される児童が全体の41%から83%に増え、他の学年においても成果が見られた。

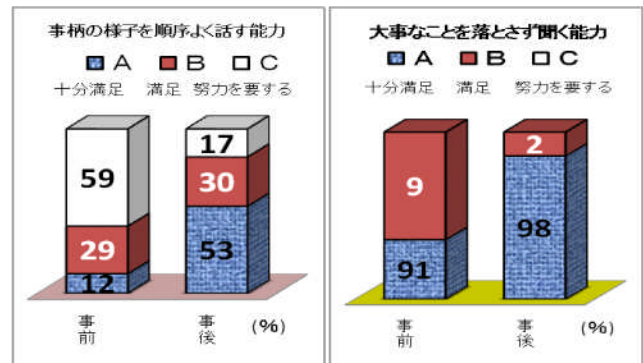


図10 他の学年で実施した結果(49人)

これらの結果から、スピーチの系統的指導プランをもとにした授業実践は学年に応じた話す能力・聞く能力が身に付くことに有効であると考えられる。

2 スピーチの系統的指導プランをもとに身に付けた力を他教科等において活用することで、日常的な力を育むことができたか。

教師・児童の意識

本研究の仮設(2)にあたる検証では、「国語の学習で身に付けたどんな能力を活かすかを、教師・児童の両者が意識して他教科で活用する」ことによって、学ぶ力を高め日常的な力につながるということが分かった。

今回は、理科の授業における活用という場面を設定し検証を試みた。単元計画は通常の場合と同じ内容で進み、児童はグループ単位で図書館の図鑑等を使って調べ、まとめる学習を行った。そして、ここで重要となるのが、国語で身に付けた力を確認したうえで単元計画の最後の発表会に臨んだという部分である。「理由を挙げて話す能力」と「メモを取りながら聞く能力」の活用を教師・児童が共に意識して発表会を進めた。理科という教科の学習であっても、「話す・聞く」は国語科の学習と関連していることを確認することで、発表時の心構えやメモをとる活動に変化が見られた。

例えば、植物のからだのつくりについて具体的に部分を示しながら話すことや、発表内容の要点をまとめながらメモするということができるようになっていたのである。また、理科の学習における児童の感想の中には、「○グループの発表は、とても分かりやすかった。」「△のからだの中も調べて、もっと発見したくなった。」や「分かりやすく話せて楽しかった。」というように、身に付けた力を活用することで理解を深めたり自信につながったりすることも見られた。

スピーチの系統的指導プランをもとに国語科で身に付けた力を他教科で活用することは、日常的な力を図るうえで有効であるといえる。

このような研究の結果から、「話す能力・聞く能力」を育てるために、国語科の学習において指導事項を明確におさえていくことは重要であり、能力の日常化をめざすために他教科等においても活用の場を設定することが必要だと言える。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) スピーチの系統的指導プランを作成し実践することは、児童の話す能力・聞く能力を育てるのに有効であった(V-1)。
- (2) 習得した力を他教科等において意図的・計画的に活用することで、能力の活用が繰り返し行われ日常的な力として定着を図るのに効果が見られた(IV-6)。

2 研究の課題

- (1) 話す能力・聞く能力を活用し、豊かに話したり聞いたりできる児童の育成をめざした実践。
- (2) 各学年における「スピーチの系統的指導プラン」の共通実践と、各教科における言語活動の場の設定と充実。

〈主な参考文献〉

- | | | | |
|----------------|----------------------|------------|-------|
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 国語編』 | 株式会社東洋館出版社 | 2008年 |
| 高橋俊三編 | 『音声言語大辞典』 | 明治図書出版株式会社 | 1999年 |
| 高橋俊三著 | 『対話能力を磨く一話し言葉の授業改善一』 | 明治図書出版株式会社 | 1993年 |
| 横浜市小学校国語教育研究会著 | 『豊かな言語活動で確かな国語力を』 | 明治図書出版株式会社 | 2006年 |
| 野口芳宏著 | 『鍛える国語教室シリーズ No14』 | 明治図書出版株式会社 | 2008年 |
| 田近洵一・井上直美編 | 『国語教育指導用語辞典 第四版』 | 教育出版株式会社 | 2009年 |
| 甲斐睦朗・興水かおり編集 | 『言語力を育成する学校』 | (株)教育開発研究所 | 2009年 |